

13 「時刻」と「時間」の学習

池田 江美子・北川 祐子

「せめて時計が読めるようになってほしい」。多くの保護者から寄せられるねがいです。そのねがいに応えるには、学習を成立させる力が育っていることが必要だとわたしたちは考えています。

例えば、

- ①分針の目盛りを学習するには、少なくとも1～60、できれば1～99までの順序数がわかる力が学習を支える力として必要である。さらに長針が一回りすると、短針がひと目盛り動くことがわかる、つまり「60分」経つと「1時間」になることがわかるためには、「位取り」の学習を理解していることが求められる。
 - ②「何時」を学習する際にも、時計のイメージをもち、1～12までの順序数がわかり、12枚のカードを並べたり数字を書いたりできる力が支えとなる。
 - ③「時刻」の学習を終えて、さらに「時間」の学習が成立するには、これまで身につけた四則計算を使いこなす力が支えになる。見通しが立てられる力、予想できる力が育っている。
- などです。

そうした基本的な考えは共通してもちながらも、授業の展開や教具は異なるのが会の会で検討される実践の特徴です。次の二つの実践は、低学年から学習を積み上げていく「時計のイメージをもって、言葉で整理する」池田実践と中学年を対象にした「分針の動きから時刻へ」の北川実践です。

(1) 時計のイメージをもって、言葉で整理する (池田実践)

1) 「とけい」の学習は難しい

「とけい」の学習には、二つの要素が含まれています。一つは、時計を見て何時何分がわかる「時刻」の学習です。二つは、「時刻」がわかった上で、何分後や何分前が捉えられる「時間」の学習です。どちらも、目には見えない、しかも刻々と移ろうものを対象としているので、子どもたちにとっては計算領域での数量の学習以上に難しい内容を含んでいます。ですから、子どもたちの認識にあわせて、6年間のカリキュラムを立てて少しずつ学習を積み重ねていくことが必要だと考えています。

また、生活様式の変化から、家庭で使われている時計はデジタル表示のものであることも、少なくありません。テレビやスマホなどで時刻を知ることができるので、時計そのものを必要としない家庭もあります。子どもたちの生活の中で、「時計」の必要性が低くなっていることも、「とけい」の学習を始める動機を薄めることにもなっています。

学校生活の中で、機会をとらえて時刻や時間を意識する言葉をかけることは、どの学級でも行われていることだと思います。マラソンの時間走でのタイマー、縄跳び練習の音楽、「長い針が10になったらごちそうさまをしよう」などです。

子どもたちが培ってきた「数と量」の学習を基本にしながら取り組むので、私は冬休み明けの1月から卒業式等の練習が始まるまでの期間を使い、目に見えないものを捉える学習と実感を伴って時間を理解する学習を子どもたちと模索してきました。

2) 「とけい」は、何と何でできているか

毎年、「とけい」の学習に入る前に行うことがあります。時計を見ずに「とけい」の絵を描くことです。初めて時計の学習に入る子たちの認識を知り、これまで学習してきた子たちの定着度を把握します。渡されたわら半紙に向かって、思い思いの「とけい」を描いてみます。時計のイメージをしっかりとって目盛りや長針・短針まで描ける子。大きな丸を描いたものの、あらら、いつのまにか「かお」になっている子。「1, 2, 3,